

ずっと忘れない

今本 政勝

朝起きて驚いた。

僕のベッドの隣にもう一つベッドがあつて、知らない男の子が寝ていた。

「誰だよ、お前」

揺さぶって起こすと、そいつはふわあつ大あくびをした。

「タカシ、おはよう」

なんで？なんで僕の名前を知ってる？

そこにお母さんが入ってきた。

いつものようにノックもしないで。僕にはプライバシーなんてものはない。

「ユウイチ君、おはよう。起きてたのね。あ、この子、ユウイチ君。しばらく一緒に住むことになったから。ご飯できてるから早く降りてらっしゃい」

言いたいことだけ言って、一階に降りていった。これもいつものこと。

ユウイチだって？おじいちゃんと同じ名前じゃん。

「まあ聞け、タカシ」

なんだ、こいつ。超上から目線。

僕とユウイチはお互いのベッドの上で、あぐらをかいて向き合った。

「わし、一応、旅芸人の子どもってことになってるから。親たちが留守の間、ここでわしを預かるって話になってる。憧れてたんじやよ。旅芸人の子どもってのに」

なってる、なってるってどういうこと。

「なに、不思議そうな顔しておるんじや？」

こいつ、なんでこんな喋り方なんだ。年寄りみたい。いや、年寄りと言うより：

「やっと気づいたか。そうじやよ、わしじや。

ユウイチ。お前のおじいちゃんじやよ」

え？え？おじいちゃん。おじいちゃんなら、僕が一年生の時、三年も前に亡くなった。それに僕の目の前のユウイチは、僕と同じでまだ子どもじゃないか。

「お前がわしのこと、だんだん思い出さなくなつて寂しいから、会いにきたんじゃ」

うん、確かにあんまり思い出すこともなくなつた。おじいちゃんが亡くなつた、あの時はあんなに悲しかったのに。

ユウイチはにやりと笑つた。鼻にしわを寄せて笑うその笑い方は確かにおじいちゃんに似てる。

「お前の好きな食べ物はなまこ。変なものが好きな子じゃ。だけど、嫌いなものはピーマンと椎茸、これは普通じゃな」

「じゃ、食べ物以外で嫌いなものは？」

「お化け。夜、一人でおしっこに行けない。夜中に目が覚めると、よくわしの布団に潜り込んできたもんじゃ。ついでに言うと、好きな女の子は隣のルミコちゃん。お前はそろそろ恥ずかしさを覚えてきて、前ほどには気軽に話しかけられなくなつて、イライラしてる。ルミコちゃんは何とも思つておらんのに。ルミコちゃんはいいい子じゃ。おじいちゃんの

タツヒコの面倒をよく見ておる。まったくタツヒコは幸せ者じゃ。わしと違うて長生きで、その上ルミコちゃんのようないい孫娘がおつて……。そうじゃ、お前がルミコちゃんに初めてラブレターを書いたのは……」

「いい、いい。もういいよ。わかった、わかった。信じる。信じるよ、おじいちゃん」
危ない、危ない。僕は慌てておじいちゃん
の口を手でふさいだ。

あわあわあわと苦しんで、おじいちゃんは、
僕の手を払いのけた。

「うぱあ、もう一回、死ぬところじゃったわ
い」

おじいちゃんと僕は顔を見合わせて大笑い
した。

おじいちゃんとランドセルを並べて歩いて
いると勢いよく後ろから体当たりされた。

「おはようっ」

ルミコだ。ちよつと恥ずかしい。僕はもう

四年生。当たり前前だけど男女がいつも一緒にいるなんてできない。それでも朝、学校に行くまでの間なら、一応こうやって話もできる。だってずっと隣同士に住んでいて、同じ学校に通っているんだから、いたって自然だ。

おじいちゃんが亡くなった日の夕方、僕は堤防の上で膝を抱えて海を見ていた。おじいちゃんは、ここから魚を釣るのが大好きだった。海の匂いをかぎながら、波がテトラポットに当たって砕ける音をずっと聞いていた。おじいちゃんも、きっと好きだったんだと思う。この匂いとか音とか。

いつの間にかルミコが隣に座っていた。ルミコがそっと僕の手を握ってくれた。握られたその手に僕はほんの少しだけ力を入れてみた。ルミコはもっと強く握り返してくれた。ルミコと手を握り合ったのは後にも先にもその時だけ。まあ、小学生の初恋としてはいいセンいってるはず。

「何、ぼーっとしてるんだ。紹介しろよ、俺

のこと」

あ、おじいちゃん、おじいちゃん言葉じゃなくなってる。ま、当然といえば当然だけど。

「こいつ、ユウイチ。旅芸人さんの子どもなんだって。しばらく、うちに住むんだ」

「へえ。そうなんだ。でも、寂しくないからね。タカシと私が友達になってあげる」

すぐにルミコは「あっ」って顔をした。

「ごめんなさい。なってあげるだなんて。言い直します。お友達になってください」

そう言っつてルミコは右手を差し出した。おじいちゃんは満面の笑みで、その手を両手で握りしめた。

「よろしく、です」

くううつ。本当はおじいちゃんのくせに。よくもルミコの手を何の遠慮もなく両手で握ったな。ずっと隣に住んでて幼なじみの僕でさえルミコの手を握ったのはあの日の夕方だけなのに。僕の大切な大切な思い出なのに。ばかやろう。おじいちゃんのばかやろう。

昼休みのことだった。

ルミ子が歩くその後ろをケンタがニヤニヤしながらついていってる。

ルミコの表情は固かった。ケンタは、意地の悪い奴で僕は嫌い。

「見に行かなくていいのか。体育館の裏に行くぞ。心配じゃなあ」

おじいちゃんが僕の脇腹をつついた。

「行かないのかい。だったらわしが行ってくる。なにせ、わしとルミコちゃんは固く手を握りあった友達じゃからのお」

おじいちゃんは例のごとく鼻にしわを寄せて笑った。

「まあ、ちよつと見てきてやるか」

余裕の表情と言葉で答えたものの、僕は走り出していた。

体育館の裏は日陰になっていて七月の昼間でも薄暗くて、空気までじめっとしている。

体育館の角に隠れて二人の様子を覗いた。

ルミコが背の高いケンタを下からにらんでる。

「やめて欲しいのよね。下駄箱の中とか机の中にゴミを入れたりするの」

「なんだ、ケンタのやつ、そんなことしてるのか。いじめじゃないか、それ。」

「タカシ、甘いな。それは違うぞ。いじめなんかじゃない。ケンタはルミコのが好きなんじゃ」

「どうやら僕の考えること、おじいちゃんにはすぐにわかってしまうらしい。」

「どうする？出て行って俺のルミコに何すんだって言うか」

「なんだよ、それ。そんなこと言えるかよ」
「あ、そ」

おじいちゃんスタスタ歩いて二人の前に出てまっすぐにケンタを指差した。

「お前、男らしくないぞ。男ならそんなまどろっこしいいたずらなんかしないで、好きって言えばどうだ」

「ばか。小学校四年生がそんなこと言うか。」

「とは言え、さすがのケンタもたじろいだ。」

「ルミコなんて別に好きじゃないし。それにそのいたずら、俺がやったって証拠でもあるのか」

背の高いケンタがおじいちゃんに詰め寄った。おじいちゃんは落ち着き払ってケンタを両手で押し返して言い放った。

「こうなったら決闘、勝負だな」

ケンタが両手の袖をまくりあげた。

「なんだかわからないけど、いいぜ。転校してきたばっかだからって調子にのんなよ」

ケンタは顔をグイっとおじいちゃんに近づけてすごんでみせた。

おじいちゃんはケンタの顔を両手で挟んでゆっくりと僕のほうに向けた。

「相手が違う。勝負の相手はタカシだ」

え？なんで？なんでそうなる？

「どっちでもいいよ。ほら、かかってこいよ」

ケンタはもう爆発寸前だ。

「ばかだな、お前たち。喧嘩なんかしたらど

つちもルミコちゃんに嫌われるぞ。なあ、ルミコちゃん」

驚いた目をしていたルミコがコクコクと頷いた。

「肝試しだ。明日は旗日で休みだからちようどいい。少しくらい寝るのが遅くなってもかまわないだろ。ケンタ、お前は夜の八時に一人でお寺に行つてこい。お堂の前にある賽銭箱の前に大きな石を置いてくるんだ。御堂の前に行くにはどうしたってたくさんのお墓の前を通らなきゃならない。タカシは九時から同じようにお寺に行く。それでタカシがその石を持って帰ってくる。もし、お前の石があったらルミコちゃんにいたずらしたのはお前じゃないって信じてやるよ」

夜の八時を過ぎた。

僕とおじいちゃんは部屋の窓から星空を見ていた。

「ケンタ、今頃一人で歩いてるんだよね」

「まあ、な」

「あいつ、結構勇気があるな。嫌な奴だけ
ど」

「お前だってすごいじゃないか。あともう少しで九時になる。九時になったらお墓の間を
通って、御堂まで行くんじゃないやろう。ケンタの
置いてくる石を拾うために。」

「おじいちゃん、一緒に行ってくれるよね」
へ、という顔をしてからおじいちゃんは手
をブリブリ振ってみせた。

「肝試しじゃぞ。一人で行くに決まってるじ
ゃないか」

え、そんな。

「タカシ、お前、今、ずるいこと考えてるじ
ゃろ。いいか、誰が見てるのか見てないとか
じゃなくて、約束は守るもんなんじゃ」

約束たって、僕がしたわけじゃなくて、お
じいちゃんが勝手に決めたことじゃないか。
それに、そうだ。ケンタだって、一人で行く
かどうか、わかんないじゃないか。もっと言

うと行くか行かないかさえ、わかんないじゃないか。

「じゃからタカシ、そういうことを考えるのはやめろ。男の子なんじゃから。腹決めていけばいいんじゃ。なんじゃ、墓場の真ん中、通っていくことくらい。墓場の何が怖いって言うんじゃ」

「だって、お墓って、死んだ人がいるところでしょ。お化けのいるところでしょ」

言ってから、はっと気がついた。

僕がおじいちゃんを指差したのと、おじいちゃんが おじいちゃん自身を指差したのはほとんど同時だった。

「失礼な。お化け扱いしよって。わしはお前のおじいちゃんじゃぞ」

夜の九時になった。僕は仕方なく、暗い夜道をとぼとぼ歩いた。たくさんあった家が途切れると、途端に寂しい道になる。田んぼの中の一本道を通って、小高い丘を一つ越える

と、そこには大きな木々がうっそうと茂る薄気味の悪い谷がある。木々たちは悪霊がもがき苦しんでいるかのよう、その枝をぐねぐねと伸ばしている。僕たちはここを地獄谷と呼んでいる。

それでも、空はよく晴れていて、月の明かりが美しかった。

ようやくお寺に着いて大きな門をくぐると、そこにはお墓がたくさんある。

するとその瞬間、急に月に分厚い雲がかかって、あたりが一気に暗くなった。お墓たちはその一つ一つがくつきりと黒い影になった。生あたたかい風が僕の頬をなでていった。こんな時に声を出したら、もっとこわくなる。走り出したりなんかしたら、きっと何かがぴったり僕の後ろをついてくる。

墓場にはきつとたくさんの亡くなった人たちがいて、今、僕のことをじっと見ている。その視線を確かに感じる。ちよつとでも怖がっているなつて思われたら最期。きつと震え

る声で「怖くないよ」なんて言っただけで近づいてくる。今にもお墓の一つから青白い火の玉がゆらゆらと飛び出てきそうだ。

僕は歯を食いしばった。歯を食いしばったつもりだけど上手にできなくて、カチカチ音がした。そのカチカチという音でさえ、墓場全体に響き渡るようだった。

ああ、どうして。どうしておじいちゃんは、こんなことを僕にさせるんだ。言い出しつぺはおじいちゃんじゃないか。

「走らない」と心に決めて、暗い墓場を一步、また一步と前に進んだ。

長い。墓場ってこんなにも長く続いていたのだろうか。もしかしたら、もう僕は悪いお化けに捕まっただけで、永遠にこの墓場から逃れられないのかもしれない。

と、やっとの思いで墓場を抜けた。

目の前に御堂が見えた。

それでも僕は用心して走らずに、大股で御堂まで歩いて行った。

もしかしたら、お化けが僕のぴったり後ろにくつついてるしれない。だけど僕は最後まで走らない。堂々としていればいいんだ。そうすれば怖いものなんか何もない。

御堂の前に着いた。

賽銭箱。

僕はへなへたと、その場に座り込んだ。

ない。石はなかった。

ケンタは来なかったんだ。

ん？

と、いうことは僕は石を持って帰れない。しまった。そうだ、僕がここに来たといくら言い張っても、証拠がない。結局、僕もケンタも意気地なしってことになってしまう。

突然、後ろから声をかけられた。

「偉かったぞ、タカシ」

ひええっ。僕は多分、今、小学校四年生垂直跳びの世界記録を出したと思う。

おじいちゃんだった。

「かわいい孫をこんな夜、一人で行かせるわ

けないじやろ。この優しいおじいちゃんが」
おじいちゃんはもう僕にとって、おじいちゃんなのか、意地の悪い友達なのか、よくわからない。

「さあ、どうする？」

どうするって言われても……。

おじいちゃんは、身軽にぴよんと賽銭箱の上
に飛び乗った。角のところに足を置いてう
まくバランスをとってる。垂れ下がっている
鈴をその太い紐ごと取り外した。

ガチャリン。

驚くほど大きな音を響かせて、鈴が僕の足
元に転がり落ちた。

「まあ、しようがないじやろ。こいつを持っ
ていけばいい」

さすがおじいちゃん。よくとっさにこんな
こと思いつくもんだ。でも、たたりとかばち
とか、そういうの、ないのかな。

「あ、お前が今、考えてること。わし、どう
でもいいから。わしはもう死んでるんじゃないか

ら」

正確に言うとおじいちゃんはお化けつてことになる。そうだ。お化けと一緒にならお化けなんて怖いはずもない。ようやく僕もふっきた。

よし、この鈴を持って帰ろう。

「ねえ、おじいちゃん。ちよつと代わつてよ」

「だめじゃ。それはお前の仕事じゃ」

さすがに重くて重くて。それまでは大切に抱きかかえていた鈴だけれど、もうどうでもよくなって太い紐を持って引きずって歩いた。

ジャンジャンジャカジャカと、にぎやかな音が暗い道に響いた。

それにしても重い。さすがに重い。手がちぎれそうだ。

無理だ。小学校四年生が引きずって歩ける重さでも距離でもない。

やっとの思いで地獄谷まで来た。

「えいつ」

僕は鈴を地獄谷に思い切り投げ捨てた。

ジャンジャンシャンシャンシャーン。

鈴の音は少しずつ小さくなって、やがて暗闇の中に吸い込まれていった。

次の日の朝、おじいちゃんにたたき起された。

「いかななあ、タカシ。うんちをするとお湯が出てお尻を洗ってくれて、その上勝手に流してくれる。これじゃあ人間、ものごとに責任がもてなくなるぞ」

なんだよ、それ。そんなことで起こすなよ。せつかくの休みなのに。昨日の夜、僕がどれだけ大変だったかは知ってるだろ。

「いいから早く起きろ。村中大騒ぎじゃぞ。たたりがあるとかばちがあたるとか」

おじいちゃんは、それまでふざけていた顔を神妙な顔にした。

「タカシ、これはただごとではないぞ」

それはないよ、おじいちゃん。鈴を外したのはおじいちゃんだろ。それに僕が地獄谷に鈴を捨てた時だっけ一緒にそこにいたじゃないか。

インターホンが鳴って、出てみるとルリコが立っていた。目が真っ赤だ。

「泣いていたのか」

おじいちゃんが男前の顔になって聞いた。ルリコはコクンと頷いた。そして、僕を厳しくキリツとにらんだ。

「タカシでしょ。鈴を隠したの」

そりゃ、そうなるよね。僕がお寺に行くこと、ルリコは知ってたもんね。

ルリコがそう思うってことはきつとケンタもそう思ってる。あいつのことだから、きつと村中に僕のせいだって言いふらす。

困った。えらいことになったぞ。

「鈴を返して」

返して、と言われても。返せるものだったから今すぐにも返したい。

「タカシ、男の子は自分のやったことには責任を取るんじゃない。でなきや、トイレのうんちになっってしまうぞ」

おじいちゃんは僕にだけ聞こえる声で言った。ああ、今、トイレのうんちなんで、まったく関係ない。それにそういう下品なことを言うな、ルリコの前で。

おじいちゃんがルリコに説明した。

「肝試しの結果はタカシの勝ち。ケンタが置かずの石はなかったんだ。タカシはお寺まで行ったという証拠に鈴を外した。その鈴を持って帰ろうとしたんだけど、途中で重くなって、地獄谷に投げ捨ててしまったんだ」

「地獄谷」

瞬間、ルリコが固まった。

ほっぺたを膨らまして胸を押さえてふーつと息を吐きだした。そして決心がついたように言った。

「行きましょう、地獄谷。鈴を拾いに」

「だめだよ、ルリコ。女の子が行くようなと

ころじゃない。僕とユウイチで行ってくる」
「だめ。だってタカシがお寺の鈴をとってきたのって私のためでしょ。ケンタの魔の手から私を守るためでしょ」

「なんだからリコの中で話がオーバーになつてるような……」

「それに、私のおじいちゃんが一番ショックを受けてるの。おじいちゃん、信心深いからきつとよくないことが起こるって、今、熱出して寝込んでる」

「へへん、タツヒコらしいや」

おじいちゃんは、これまた僕にだけ聞こえるように意地悪く言った。それから、またもや男前に顔になって宣言した。

「よし、冒険の始まりだ」

地獄谷になんて、初めて足を踏み入れた。

大丈夫だ。焦らずにゆっくり降りればいい。

道なんてないけれど、それでも少しずつ少しずつ木々の枝や幹、絡まるつるを伝って行け

ばいい。三人で固まって降りていけばいいんだ。大丈夫。谷の底に辿りつくなんてそう難しいことじゃない。気をつけて、気をつけて。きつと谷の底には鈴が落ちているはずだから。

僕たち三人はお互いに声を掛け合って、一歩ずつ一歩ずつ谷を降りて行った。

先頭は鈴を落とした責任を取って僕。一番後ろは一番頼りになるおじいちゃん。守ってあげなきゃいけないレディのルリコが真ん中。これはおじいちゃんが決めた。何、考えてんだか。こんなことになった、そのもともとは変な肝試しをさせたおじいちゃんなのに。

「あーっ」

これはおじいちゃんの叫び。

「キヤー」

これはルリコの悲鳴。

ドッスンと上からの衝撃を受けて、僕の記憶はなくなった。

目が覚めた時、おじいちゃんとルリコが上

から僕を見下ろしていた。

何本もの木漏れ日が僕たちの周りに降り注いでいた。

そこは大きな沼のほとりだった。

「無いの。どこを探しても」

僕が気絶している間に二人で鈴を探し回つたらしい。

「本当にここに捨てたの」

僕は絶望的な気持ちで頷いた。決定的。鈴は沼の底だ。

僕たち三人は黙り込んだ。

「竜じゃ。竜にとってきてもらおう」

「えっ？」

突然のおじいちゃん言葉にルリコが驚いている。僕もだけど。

「近所のやんちゃな兄ちゃんが着ているジャンパー、あれに張り付いてるあの竜じゃ」

「なんだか変よ。ユウイチ君、お年寄りみたいな話し方になってる」

今、説明してもきつとルリコには理解でき

ない。今じゃなくてもだけど。

「いいんだ、ルリコ。続けて、ユウイチ」

「きつとお前たちは笑うじゃろうし、信じられないじゃろう。けれど、わしは今、思い出した。この沼には竜がいる。わしは何度も会ったことがある。友達じゃった」

ルミコが僕の脇腹をつついた。

「本当にどうしちゃったの。ユウイチ君」

僕もおじいちゃんもルミコに構わない。

「初めて話すことじゃ。わしは子どもの頃、いつも一人ぼっちじゃった。寂しかったわしにとって竜は大切な友達じゃった」

その時だった。

水面がごうごう音を立てて渦を巻いた。うねるように強い風が吹いた。僕たち三人は立っっていられなくなっ、その場に座り込んだ。

突然だ。渦の真ん中から激しい水しぶきが上がった。水しぶき襲いかかってきて、僕たちは目を開けることもできなかつた。やっこのことで薄く目を開けると、水しぶきの中を

大木のように太くて長い緑色が空に駆け上っていくのが見えた。その緑色が地獄谷のふちのところまでスコンと向きを変えて僕たちの前に舞い降りた。

竜だ。

長いひげをゆらゆらさせて、大きな目をらんらんと光らせている。太くて長い体は虹色にきらめく緑色のうろこでおおわれていた。

竜は軽トラックほどもある顔を僕らの前に突き出した。だけど、ちっとも怖いとは思わなかった。竜の体中から喜びの気持ち伝わってきた。

「ありがとう、ユウイチ。思い出してくれたんだね」

竜がうれしそうに雄一に語りかけている。「ごめんよ、竜。わし、タツヒコっていう仲のいい友達ができた。それで、わしはお前のことを忘れてしまった」

おじいちゃんが竜の顔に両手でしがみついた。竜の長いヒゲはゆらゆらと揺れている。

「仕方ないよ、ユウイチ。君は大人になったんだ。私とその人の中で生きていられるのは、その人が子どもの時だけ、信じる心をもって
いる間だけさ」

おじいちゃんはしがみつく手に力を込めた。
「そうじゃよ、竜。わしはもう子どもじゃない。おじいちゃんじゃ。それどころか、もうわしは死んでもうた。ああ、それでもわし、お前のことが見える。ほら、こうしてお前の顔を抱きしめると懐かしい匂いがする」

竜の目から大粒の涙がこぼれて落ちた。
ルリコが僕の手をとって竜とおじいちゃんの前
の前に立った。

「竜。私たちにもあなたが見えるわ。だってあなた、目の前にちゃんとい
るんだもの。約束する。私とタカシもあなたの友達。だから、あなたはずっと生きていられるわ」

竜はきつとその存在を信じる人がいなくなると、生きてはいけない。竜の存在を信じるなんて、子どもの世界だけのこと。竜が生き

ていくためには「いる」って信じる子どもの心が必要なんだ。

おじいちゃんが子どもだった頃の心を取り戻したから、竜はまた生きることができた。僕もルリコと同じ気持ち。竜がここにいることを信じる、ずっと忘れない。友達になる。そうして竜をずっと生きさせてやる。

おじいちゃんの腕を離れて、竜は顔を僕たちに向けた。それから沼に潜ってすぐに出てきた。

「君たちの探し物はこれだろ」

竜はつかんでいた鈴を返してくれた。

「この鈴を返してしまっても、私がここにいることを信じてくれるのか。覚えていてくれるのか。」

「当たり前だろ」

胸を張って僕が答えた。

「約束するわ。私、ずっと忘れない。信じる心はずっとなくさない」

「ありがとう。これは約束のお礼だよ」

パチンパチンと音がして、僕とルリコの前に木の葉ほどのうろこが一枚ずつ落ちてきた。

次の日の朝、起きるとおじいちゃんはいなかった。ベッドもなかった。

「朝ご飯よ」

いつものようにノックもなく、お母さんが僕の部屋に顔を出した。

「そんなことよりおじい…、ユウイチは」

「まあ、この子ったら。おじいちゃんのことを呼び捨てにして。仏壇に手を合わせて謝ってらっしゃい」

そういうことか。いなくなっちゃったんだね、おじいちゃん。でも、大丈夫だよ。僕、絶対に忘れないから。ユウイチになって僕に会いに来てくれたことも含めて。おじいちゃんには三年前に亡くなったわけじゃない。ずっと永遠に生き続ける。僕の中で。昨日、友達になっただばかりの竜と一緒に。

もらったうろこは机の一番上の引き出しに

入れた。引き出しを開けて確かめようとして、
いったんやめた。

もうないのかも、と思った。

うろこはきつと僕とルリコの心の中にだけ
ある。竜は僕とルリコの心の中だけで生き続
ける友達。

僕はそつと、引き出しを開けてみた。

あった。

緑色のうろこが虹色にきらめいていた。

「行ってきまーす」

おじいちゃんのいない朝。いつもより元気
よく家を出た。

ドンツと後ろから体当たりされた。

「これ」

花柄の封筒に入った手紙を胸に押しつけら
れた。封筒は甘い花の香りがした。

ルリコは顔を真っ赤にしてすぐに走り去っ
た。僕はその時、確かに見た。ルリコがして

いる緑色のペンダントトップは昨日、竜が僕たちにくれたうろこだ。朝の光が反射して虹色に光ったから間違いない。

「タカシへ

二人きりの大冒険。竜と友達になったこと、ずっと覚えていようね」

手紙の最初はこう始まっていた。

やっぱりおじいちゃんはいなかったことになっ
ていた。

「竜からもらったうろこ、私、宝物にしてずっと持っている。タカシもそうだと嬉しいな。大人になっても、もし、私とタカシの二人ともが竜のうろこを大事に持っていて、竜がいるってことを信じ続けていられたらいいなと思う。そしたら私、タカシのお嫁さんになりたい。なっ
てあげる。」

ルリコ」

きっと僕もいつか大人になる。忘れてしま

うこともたくさんあるだろう。だけど、ずっと覚えていたことだってある。

おじいちゃんの思い出。

ルリコと僕が竜と交わした約束。

僕は絶対に忘れない。